

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
1・2年後期	1・2	2	選択
担当教員			
建築学科全教員			
添付ファイル			

講義概要	建築学は実学であり、材料、歴史から構造、環境、設備、計画、意匠、施工、監理まで様々な分野の現状を知る必要がある。 この講義は、建築を実践的に研究あるいは実務を行っている教員が、それぞれの分野での最新の状況を解説する。そのことにより、建築業界での最新の知見を知り専門分野に役立たせることを目的とする。この授業はオムニバス形式とし、各教員及び外部講師により進める。		
授業計画	1	建物の地震被害（渡辺） 1995年の阪神淡路大震災や2011年の東日本大震災などでは多くの建築が被害を受けている。地震被害の実例を紹介し、被害を防止するために必要な耐震設計の重要性を考える。	
	2	技術開発の最前線（渡辺） 建築技術の開発は日進月歩である。特にエンジニアリング系（構造・材料や環境・設備）分野では活発な技術開発が行われている。最新の技術開発事例を紹介・解説する。	
	3	カンボジア・インドネシアの石造遺跡（林） アジアの歴史的建造物の具体的な事例として、カンボジア・インドネシアの石造遺跡を紹介する。西洋および日本とは全く異なる文脈を持つアジアの建築を知ること、人類がどのように建築を理解し、それを造ってきたか、建築文化の広がりや多様性を理解する契機としてほしい。	
	4	東南アジアの伝統的木造住居（林） 東南アジア各地の伝統的な木造建築について学ぶ。インドネシア、ベトナム、フィリピンなどに所在する高床式建物、日本の先史時代の木造建築との関連、身体寸法と住居について解説する。最後に伝統的な木造建築文化に特有の「生きている住まい」という考え方を紹介し、「持続可能な社会」とは何かを問う。	
	5	建築計画・デザインと作品1（脇坂） 都市・建築の実践としての最新事例を取り上げ、プロジェクトマネジャー、デベロッパー、建築家、建築技術者、ファシリティマネジャーなど幅広い建築領域の職能の役割に触れながら、作品のプロセス、空間構成、実践を支える方法論等について理解し、討議を行う。	
	6	建築計画・デザインと作品2（脇坂） 都市・建築の実践としての最新事例を取り上げ、プロジェクトマネジャー、デベロッパー、建築家、建築技術者、ファシリティマネジャーなど幅広い建築領域の職能の役割に触れながら、作品のプロセス、空間構成、実践を支える方法論等について理解し、討議を行う。	
	7	『生活の質を考える』①（石川） ・日本の住宅ストックのうち、一定基準の省エネ性能規準を満たす住宅は全体の1割程度である。特に、温暖地域の静岡県下は断熱性能が著しく低い。室内環境や身体活動量等、生活の質向上に不可欠な建築環境を考える。 ・履修生の現在の住まいとコミュニティを対象とし、『CASBEE健康（すまいの健康チェックリスト、コミュニティの健康チェックリスト）』を活用して環境評価を行う。生活の質向上を考慮し、健康面から見た現状の課題、改善策を提案発表する。	
	8	『生活の質を考える』②（石川） グループを構成し、代表者の現在の住まいを対象とし、『CASBEE戸建』を活用して環境評価を行う。現状案と、生活の質向上を考慮した改善案を提案発表する。	
	9	住宅における中間領域1（田井） 講師（田井）が設計した住宅における中間領域のあり方を、平面・断面計画および建築を形作るディテールの両面からあぶり出す。設計の背景にある敷地や施主による条件から、いかにして建築が生まれたか、具体的な設計プロセスも合わせて解説する。 参考教科書として「住宅断面詳細図集」（田井幹夫・著）を使用する。（2回通し）	
	10	住宅における中間領域2（田井） 9と同じ	
	11	簡単な鉄筋コンクリート造建物の構造設計（崔） 鉄筋コンクリート造2層1スパン建物を対象に、長期荷重、短期荷重（中小地震）および大地震に対する性能（使用性、修復性、安全性）を検討し、実際の構造設計の流れをつかめるようにする。	
	12	木造住宅および鉄筋コンクリート造建物の耐震改修の現状（崔） 過去の地震による木造住宅および鉄筋コンクリート造建物の被害事例を紹介し、耐震診断・耐震改修の必要性を説明する。さらに、耐震改修技術および国・地方公共団体など行政の耐震改修対策を紹介し、耐震改修の現状を把握する。	
	13	最新の制震建物の概要（外部講師） 近年、免震構造や制振（制震）構造が増えている。特に制振構造はパッシブ型、アクティブ型に分類されその数も多い。超高層での風に対する制振構造や地震時に大きなエネルギーを吸収できる制振ダンパーも多く開発されている。最近のトレンドやシステムについて概説する。	
	14	建築の批評1（外部講師） 建築はどのように批評されるのかを学ぶ。建築を批評されることで外部的視点を獲得する。その行為により建築が発展してきた。過去の批評を知り、どのように建築を客観視するかを学ぶ。	
	15	建築の批評2（外部講師） 建築はどのように批評されるのかを学ぶ。建築を批評されることで外部的視点を獲得する。その行為により建築が発展してきた。実践的に批評を行うことで建築の客観性を獲得する方法を学んでいく。	

授業形態	講義、討議を基本とする。輪講を課すこともある。
達成目標	・実際に現場等で用いられている建築を理解する。 ・建築計画（住宅、歴史）関連の最新の動向に関して理解を深める。 ・建築構造施工の最新の技術について理解を深める。 ・建築環境の最新の技術について理解を深める
評価方法・フィードバック	毎回の授業でレポートを課し、総合点で評価する。
評価基準	総合点が100点満点で60点以上の者に単位を与える。秀：100点～90点、優：89点～80点、良：79点～70点、可：69点～60点、不可：59点以下
教科書・参考書	各講師が授業計画で示している図書を用いる。
履修条件	学部での基本的な建築の知識を有していること。
履修上の注意	講義のノートは確実にとること。
準備学習と課題の内容	各講師の授業計画を十分理解すること。 事前学習（宿題）等ある場合は、必ず行っておくこと。
ディプロマポリシーとの関連割合（必須）	